



昭43年卒 小林 光氏
環境省大臣官房審議官

昭48年、慶應義塾大学経済学部卒。昭48年環境庁入庁後、地球環境対策の法制度化などを担当。地方では、北九州市産業廃棄物課長。海外では、パリ大学大学院都市研究所へ留学、米国東西センターにて客員研究員。著書には、「日本の公害経験」、「環境保全型企業論」など。子供向きには「ともだち、うんちくん」なども。現在、自宅でのエコハウスづくりの経験をブルーバックスから刊行すべく、執筆中。

同窓生 シリーズ

49

高校へ入った時の印象はと言えば、ずいぶんと偉そうで、難しそうな所に身を置くことになったもんだね、という驚きである。中学生から一足飛びに、当時の先端文化の担い手へ接近した感覚、言い換えてもよいかもしれない。

山岳部の部室で見せてもらった、おそらくは甲斐駒やその支峰への冬山登山のハミリ映画は、まるでヒマラヤもかくやと思わせたし、映画研究会の少しエッチでとても思わせぶりの前衛作品、難渋な哲学的な用語が並んだ学生新聞など、何をとっても、自分と同年代の人たちがやっている業とはなかなか思えない出来栄であった。

校門を入った左手の汚い建物が、多数のクラブの部室が集まったアパートであったことにも感心した。そこでは、生徒が一心不乱、それぞれに大切そうな活動をし、難解なアウトプットを生産している。中学ではついぞ見聞きしなかつた景色だった。校門の右手、ヒマラヤスギの下には、他の部室の喧噪から離れて我

が生物部の小屋があつて、いかにも深遠そうな博物学的雰囲気醸していた。授業では、一年でも英語がめちやくちやに難しい。辞書引きには朝の三時くらいまでかかったが、なにせ普通の大人が読む随筆などがサイドリーダーなのだから、仕方がない。美術の時間には、勝手に油絵を描かせてもらえたし、実験着を着流した生物の先生が遺伝子をつまに与太話を講じていた。現代国語の授業は、哲学思想の講義のようだった。中間テストや期末テストの他に、特考という試験が何回もあつて、問題は、これでもかと言うほど、ひたすらに長文で難解だった。

街へ出れば、コーヒの匂いが立ちこめたジャズ喫茶が暗い階段の下にくつろぎ、紀伊国屋では話題の本が皆立ち読みできて、階上のホールではベルイマンの作品などがかかっていた。

もともと、街の方は、二本白線の学帽で歩けばどうしたって田舎の家出学生と間違われ、直ちに補導されるとの噂だったから、深くは探求しなかつたけれど。

こんな具合なので、当時の新宿高校のイメージは、百科全書みたいに博覧強記で、ちよつとベダントイックな気取りもある、シツクな玉手箱、とても今なら言いたくなる。

そうした学校に通ったことが、その後の人生にどんな影響を及ぼしたかは全く分からない。学校群の前の入学だったから、学校は自由に選べたから、別の高校を選べばまた別の人生があつたのかもしれない。あるいはそうではなく、新宿高校で嗅いだと思つたのは、その時代の匂いだったのかもしれない。

いずれにせよ、他人に問われて、「高校は都立の新宿でした」と答えるときに、教科書だけの暮らしではなかつたですよ、というメッセージを受け取ってもらえることは幸せだった。

新宿高校の東隣は、御苑から神宮へと続くうっそうとした森である。絵にも描かせてもらったし、天気の良い日の昼のお弁当には、地境の万年堀に開いた穴をくぐつてたびたびおじやまもさせていただいた。当時は全然知らなかつたが、御苑は政府の所有であつて、今では環境省の所管地である。人生への影響は、やはりあつたのかと思う。

★編集後記★

朝陽祭をメインテーマに、準備から後夜祭まで、生徒達のいきいきと楽し様子をお届けしました。また、文化部や同好会の紹介もしました。御協力頂きました皆様にご心より御礼申し上げます。